

文=五月女善重
(五月女総合プロダクト)

僕らがつくる、 未来の古参社員

弊社には現在、僕が入社する以前から勤務している、いわゆる古参社員が複数名在籍しています。パチンコ部門で営業をみる社員もいれば、グループ会社でデスクワークにはげむ者もいます。

先代が社長だったころ、社内には怒号が満ちていました。

「何やってんだっ!」

昔から長男として厳しく育てられた僕には当たり前な出来事です。相手は社員といえども他人。新入社員だった僕は、

いぞ、熱はないか?」と、終始気を配っています。

悩みを抱えた者の気配は敏感に察知し、ときには社員の家族まで巻き込んでプライベートな問題の解決にも努めています。「そこまでするの?」と見ているほうが慌てるぐらい、社員の生活に入り込んでいました。会社での先代は、非常に世話焼きだったのです。

僕には厳格な父親でしたから、「手っ取り早く躱けるには、厳しくするのが一番『簡単』なのだ」と思っていたのですが、それは人生経験が浅かった僕の、勘違いでした。

「本当は、厳しくするのが一番『難しい』のではないか?」

スパルタだけでは、人は付いて来なくなります。

物分かりの良い上司では、尊敬されません。

「ものすごく厳しくするには、ものすごくフオローが必要なのだ」。

幸いなことに僕は、古参社員とぶつかったことがありません。現場を見ている者も、我を通すことなく、若手の面倒をよく見ています。若手と古参が互いに

尊重し合い、それぞれのポジションにうまくおさまっているのです。

おそらく、先代が個別に深い愛情を注いだことで、古参社員にも「自分は会社から必要とされている」という精神的な余裕が生まれたのではないのでしょうか。それは愛社精神に繋がりますので、若手の足を引く張って会社に悪影響を及ぼすことなど、まず考えないでしょう。

さて、このまま会社が存続し、僕が社長業を無事にまっとうして次の代になったとき、はたして今の若手たちは僕を慕い、働き続けてくれるのでしょうか。彼らが古参と呼ばれる立場になったとき、将来の若手をみちびく、頼もしい存在になるのでしょうか。

古参社員を「新風を邪魔する遺物」と悪者にするのも、「経験豊富な先輩」として賢者に仕立てるのも、経営者の振る舞いが大きく関与している…それに気づいたとき、僕は襟を正したのです。

▲



さおとめ・よししげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在9店舗を経営。1965年生まれ。